
共同研究「ロシア語教育における語彙と文法」経過報告

堤 正 典

大学における教養外国語としてのロシア語教育を見直し、現代日本人が学びやすい教育内容・教材の検討を行うのが、この研究の目的である。まず現在検討すべき課題として、本学で開講されている「ロシア語初級」程度の入門段階で、導入すべき語彙と文法の検討を行っている。

ロシア語は語形変化が豊富な言語であり、入門段階においても様々な語形変化を記憶することが必要になる。語形変化にも頻度が高いものと低いものがあり、当然頻度が高いものから記憶すべきである。例えば、ロシア語の形容詞（長語尾形）の変化には全部で6つのパターンがある。基本的な2つとそのバリエーション4つと考えることができる。しかし、基本的なパターン2つのうち、片方の変化パターンの形容詞は、入門段階に学習すべき語の中には非常に少数である。したがって、基本的パターンであるとしても、それを第一に学習者に導入する必要はなく、形容詞変化パターン

の導入にはこのあたりのことを反映したものにすべきである。このような問題がロシア語文法の至るところに見受けられる。

入門段階で導入すべき表現も検討が必要である。ロシア語では簡単な表現においても文法事項が関わってくるが、中には語形変化の導入なしに用いられることができるものが、いくつかある。そのようなものからまず導入し、学習者に過度の負担がかからないようにして、ロシア語の有用な表現を覚えていくことも考えられる。

現在、外国語科目においても、本学をはじめ、多くの大学で学期制の導入が検討されていたり、実際に導入されていたりする。しかし、国内のロシア語教育界では、それに向けての議論や、必要な教科書・参考書の編纂が活発に行われているとは言いがたい。本研究はそのような欠落を補い、新しい視点にたつロシア語教材の開発に取り組もうとするものである。
